なぜ国会報道は政局報道になってしまうのか？求められる「論点に沿った」報道

上西充子　2020.12.10

第7回。今回は、国会報道を取り上げる。「与野党攻防」「逃げ切り」「決定打に欠けた」など、なぜ国会報道は対戦ゲームのように報じられるのか。なぜ政局がらみで報じられ、論点に即して報じられないのか。この問題を考えてみたい。

批判を呼んだ「逃げ切り」記事

今回も例に即して考えてみたい。検討の素材は、ツイッター上で話題となった**毎日新聞**のこの記事だ。11 月2日からの衆参の予算委員会と 11 月 10 日の衆議院本会議を終えた段階での国会動向を示したものだ。

●**自民、学術会議問題で「逃げ切り」に自信　「批判の電話も少ない」**
月内に集中審議 – 毎日新聞 2020 年 11 月 10 日

この記事を戦史／紛争史研究家の山崎雅弘氏が「**「自民、学術会議問題で『逃げ切り』に自信」とか、政治記者なのに、なんでそんな風に「傍観」するんですか。**」と批判した。

山崎　雅弘	「自民、学術会議問題で『逃げ切り』に自信」とか、政治記者なのに、なんでそんな風に「傍観」するんですか。 **この問題の本質は「現職総理大臣による違法な人事介入」であって、与党は野党はではなく、法律の専門家に違法性を確認するのが報道の仕事**でしょう。ふざけている。

山崎氏の批判は次のように続いている。“**この問題の📍本質は「現職総理大臣による違法な人事介入」であって、与党は野党はではなく、法律の専門家に違法性を確認するのが報道の仕事でしょう。ふざけている。**”“**野党は「違法だ」と言う。与党は「違法じゃない」と言う。「議論は並行線で噛み合わない」。そんなの‼報道の仕事じゃなくて、ただの素人の見物人、傍観者です。**

📍違法か違法でないか、専門家の意見を片っ端から聞いて、それを記事にするのが報道の役目。その責務を放棄したから、政治がここまで堕落した。

”“**政治報道が「見た目の中立病」「責任逃れと判断停止の両論併記病」のぬるま湯に浸って国民を裏切り続ける態度は、政治の腐敗をただ傍観するだけでなく、論理的な批判の腰を折るという面で「堕落のアシスト役」ですらある。📍米国メディアは社会の自浄能力を発揮した。日本のメディアは恥ずかしくないか。**”

「傍観していません」という記者からの反論

これに対し、この記事を執筆した毎日新聞政治部の**宮原健太**記者が「**傍観していません**」と反論。

“**記事執筆者ですが、傍観していません。他にも野党ヒアリング詳報や自民党の学術会議批判のファクトチェックもしています。記事をきちんと読めば分かりますが、これは集中審議について与野党の主張を載せたスタンダードなものです。1つの記事だけ見て「ふざけている」と批判するのは極めて短絡的です。**

続くツイートで宮原記者は、“**報道における📍ストレートニュースとは何かという認識が浸透していないのだろう。それは各々の主張を載せた、媒体としては客観的で中立的な記事で、議論の土台になるもの。❗それを土台に作った批判を含む主観的な記事とは位相を異にする。📍新聞紙として記事が読まれなくなり説明が必要になってしまった。**” と記した。

さらに宮原記者は1年前から開設していた「**ブンヤ健太の記者倶楽部**」というみずからのYouTube チャンネルで、記事公開の4日後の 11 月 15 日に「記者が語る！ニュースとは一体何なのか！？」と題してこの問題を取り上げた。

●【LIVE 配信】記者が語る！ニュースとは一体何なのか！？【毎日新聞】

宮原記者の主張は、私なりの理解で要約すれば
●ストレートニュースと深堀り記事の違いを理解していただきたい。
●この記事はストレートニュースであり、批判的な視点も入れた深堀り記事は、他に配信している。それらを総体として捉えていただきたい。

●国会の状況を報じる場合に与党側の主張と野党側の主張の双方を並べるのはスタンダードなものだ。
というものだ。

私は宮原記者の主張には同意できる部分もある。「逃げ切り」という「自民党幹部」の声を記事で報じたからといって、宮原記者が「自民党は逃げ切った」と考えているわけでもないことも理解している。この記事の見出しは宮原記者が付けたものではなく整理部が付けた見出しであり、その見出しに対する批判まで宮原記者が背負わなければならないのは気の毒だとも感じている。

一宮俊介記者がツイートで指摘しているように、この記事の**紙面での見出しは「月内に予算委合意　野党　首相になお照準」というものであった**という。

また、私は宮原記者のこの記事を「ふざけている」とは思わない。宮原記者自身が語っているように、**これは毎日新聞の政治部記者が書く記事として「スタンダード」な形式にのっとったもの**なのだろう。

けれども、私も山崎氏と同様に、このような政治報道のあり方じたいを、各社の政治部記者には見直していただきたいと考えている。そのことを‼以下に論じたい。

ストレートニュースに含まれる「視点」「判断」

宮原記者は上記の YouTube 番組で、ニュースを下記の3つに分類している。

1. 事実関係や現場の状況を伝えるストレートニュース
2. 物事の問題点をあぶり出し、指摘、批判する深堀り記事（有識者や現場の声をもとに指摘、批判する）
3. 記者の主観的な意見を載せたコラムや社説

そして、上記の記事は「ストレートニュース」に該当し、批判的な視点を織り込んだ「深堀り記事」は別途存在していることに目を向けてほしいと主張している。

その指摘を**一応は受け入れつつも、私はより深く問い直し**てみたい。では、ストレートニュースには記者や新聞社の「視点」や「判断」は含まれないのか、と。

例えば日本学術会議の任命拒否問題を考えてみよう。学術会議が推薦した6人の学者が任命されなかった。それは事実だ。菅義偉首相は「総合的、俯瞰的な観点」から任命を行ったと説明した。その説明は説明になっていないとは思うが、菅首相がそう語ったこと自体は事実だ。

菅首相はまた、日本学術会議の会員推薦のあり方が「閉鎖的」で、「既得権益じゃないかな」と思ったとも国会で語っている（参照：第 203 回国会　参議院　予算委員会　第 1 号　令和 2 年 11 月 5 日）。

これも、その認識は私は妥当ではないと思うが、菅首相がそう語ったこと自体は事実だ。

では、**‼どれも「事実」であり、菅首相がおこなった判断や発言だから、どれもストレートニュースで報じるに値するものだろうか。**

例えば、 **●菅首相「既得権益じゃないか」 学術会議問題　参院予算委** といった見出しを付けて、菅首相の「既得権益」発言を報じることは可能だ。しかし、そのように報じてしまうと、第6回の記事で取り上げた**「世論誘導」**の問題が生じる可能性がある。

「菅首相がそう語ったこと自体は事実であり、それをニュースで報じただけだ」というスタンスでその「既得権益」発言を大きく報じることはできる。そして、毅然とした表情の菅首相の写真でも添えて報じれば、「そうか、学術会議は既得権益を享受している学者の集まりなのか。けしからんな。ここは菅首相には大ナタを振るってほしい」と記事を読んで考える人も出てくるだろう。

しかし、**恣意的な任命拒否が問題になっているのに「既得権益」などという言葉を菅首相が持ち出すのはおかしいと新聞社が判断すれば、これはストレートニュースで報じるには値しない発言**と判断することもできる。

毎日新聞は「既得権益」という菅首相の発言をそのままストレートニュースで大きく報じることはせず、**翌日の深掘り記事で「口撃」の一例として下記の記事で取り上げた。賢明な判断**であったと考える。

●菅首相が主張する学術会議の「既得権益」 本当にあるのか、いいがかりか – 毎日新聞 2020 年 11 月6日

つまり、「首相がこう発言した」という「事実」があったとしても、それをストレートニュースで取り上げるか否か、というところには、**新聞社の「判断」や「視点」**があるのだ。

そしてある「事実」をストレートニュースで取り上げる場合でも、どのぐらいの**字数**を割いてどこまでを報じるか、**写真**を付けるか、付けるならどういう写真を付けるか、**などの判断**がそこに入る。

「記者の書き方」で変わるもの

例えば毎日新聞は 10 月 18 日に渋谷駅前で行われた「日本学術会議会員候補の任命拒否に対する抗議街宣（#1018 渋谷プロテストレイヴ）」を写真・映像つきで 500 字あまりの字数を使って大きく報じた。

●**「権力の乱用繰り返されている」** 学術会議任命拒否で学者・作家らが渋谷で抗議 – 毎日新聞 2020 年 10 月 18 日

記事には「アーティストらで作るグループが主催」したことも書かれており、スピーチの内容だけでなくプラカードの内容も紹介されている。

しかし、この街宣が実施されたという「事実」を報じる場合でも、例えば「渋谷駅前に集まった若者たち」を群集として捉えた写真を載せて、**「なにやら怪しい集まり」のように見せることもできる**。

「大事な問題だと思います」という声と共に「何を騒いでいるのかわからない。迷惑」という声も紹介することによって、「迷惑だよね、まったく」という反応を呼び起こすこともできる。

このように、**「事実」を伝えるストレートニュースであっても、!!何をどういう形で取り上げるかというところに新聞社の、あるいは記者の、「視点」があり、「判断」が働き、その「視点」や「判断」が、その記事を読んだ読者に一定の「反応」を呼び起こすという効果は持ちえる**のだ。

前述の YouTube 番組で宮原記者自身も、「ニュースとは、記者の意見をダイレクトに伝えるものではない」が、「もちろん、記者の意見は、書き方によって、加わってはくる」と語っている。

国会報道の言葉遣い

さて、ここまでの考察を踏まえた上で、**最初の「逃げ切り」記事に戻りたい。**宮原記者はこれを「ストレートニュース」と位置付けた。しかし、**果たしてこれは「ストレートニュース」なのだろうか。**

まず、「事実の記述」とは言えない記述がある。

「野党は、答弁を不安視される首相に照準を合わせ追及する方針だ」
「自民党は当初、学術会議を扱うことに慎重だったが、国民の批判は広がっていないと判断した模様だ」
「一方、野党は、政権を現状では追い込むには至らないが、首相の答弁ぶりは批判対象になりうると考える」（毎日新聞）。

これらは与野党の関係者の発言や文書をそのまま紹介したものではなく、**記者がつかんだ「感触」を文章化したもの**だろう。その意味で、厳密な形での「事実の記述」ではない。ただし、その「感触」の裏付けとなりそうな言葉は紹介されている。

“**自民党幹部は「事務所に批判の電話も少ない」と述べ、「逃げ切り」に自信を示す。**”
“**野党関係者は「首相の不誠実な答弁ぶりを有権者に伝えられれば、十分政権へのダメージになる」と指摘する。**” というのがそれだ。

それぞれのカギカッコの中は、それぞれの人の実際の発言であると思われ、それらの発言から上記のような「感触」をつかんだものと思われる。
しかし問題なのは、これがいずれも「自民党幹部」「野党関係者」と、‼**匿名発言**であることだ。

匿名発言を報じることの問題は、第6回で取り上げた。匿名であるがゆえに、発言者はその発言の責を負わずに済む。読者は、誰がそう語ったのか、知ることができない。

さらに**「‼自信を示す」という言葉遣いに注目**したい。
☝「事務所に批判の電話も少ない」「逃げ切り」というこの「自民党幹部」の発言は、本当に「自信」の表れなのだろうか。「自信」の表れではなく、逆に、💢虚勢を張って、何も問題ないかのように装っているのかもしれない。ここにもやはり、‼**記者がつかんだ「感触」が反映**されているように思うのだ。

💨「ストレートニュース」として「事実」だけを書くならば、**「自信を示す」という表現は不適切**だ。**「自民党幹部は『事務所に批判の電話も少ない』と述べ、『逃げ切り』を口にした」**とするなら、「事実」だけになる。

このように書けば、その「逃げ切り」という言葉をどう受け取るかは、読者に委ねられる。そのほうが、「不誠実だ」「許されることではない」と読者が受け取る書き方にもなりうる。**「❗事実」の書きぶりの中に「批判」を込めることができる**のだ。‼なのに、「『逃げ切り』に自信を示す」と書くと、そこには**「自民党はこのまま逃げ切るだろう」という📍記者の情勢判断が反映されているように見える。**
💨だからこそ、「そんな身勝手な『逃げ切り』を毎日新聞は許すのか」という批判を招くのだろう。

この「自信を示す」のように、‼**記者の「感触」を織り込んだような表現が、国会をめぐる報道では目立つ。**😠産経新聞の下記はその露骨な例だ。

●首相「『全集中の呼吸』で答弁」に乱れも- **産経新聞** 2020 年 12 月6日

この記事にはこういう記述がある。 “**臨時国会の論戦では、野党が日本学術会議の会員任命見送りや安倍晋三前首相の「桜を見る会」に絡む問題への攻勢を強めた。しかし、首相は😡安全運転に徹し、答弁原稿に目を落とす姿が目立った。**”

「安全運転」とは何を意味するのか。失言をしないということなのか。他にも「野党の挑発にも淡々とした答弁で対応した」「冷静な答弁ぶりも際立つ」などとあり、「😠菅首相の答弁は野党の挑発に乗らない安定したものだった」という**「💢評価」がこの記事には織り込まれている**ように見え

る。

ここまで露骨ではないが、しかし、**下記の毎日新聞の記事**も似たような部分がある。

●**与党、菅首相答弁減らし成果　野党追及は決定打欠く　国会閉幕** – 毎日新聞 2020 年 12 月 4 日

“4 日に事実上閉幕した臨時国会は政府・与党が会期を 41 日間に絞り、菅義偉首相の出番を極力減らすことで、国会論戦の初陣に臨んだ首相の防護に徹した。野党は安倍晋三前首相側の「桜を見る会」前夜祭費用補填（ほてん）問題などで政権を追及したが、決定打を欠いた。野党は次期衆院選をにらみ、今後の閉会中審査や年明けの通常国会で追及を継続する構えだ。”

❗**「初陣」「防護」「決定打を欠いた」**などと、まるで対戦ゲームのようだ。国会審議は、単に支持率争いの場なのか？ **「首相の不誠実な答弁ぶりを有権者に伝えられれば、十分政権へのダメージになる」**という前述の**宮原記者**の記事にあった「野党関係者」の発言も、**支持率争いや政局がらみの発言**だ。

実際に**そういう発言をした野党議員はいたのだろうが、**🖇**なぜそういう声をここで拾って紹介するのか。**それは‼記者が、というよりは**政治部の国会報道が、‼「与野党攻防」として国会の場を描くことを「スタンダード」としているからだろう。しかし、それでよいのか。**

国会を支持率争いや政党の存在感を高めるための場や敵失をねらう場と捉えるのではなく、🖇**議論の場として捉え、論点を軸に報じることこそを「スタンダード」にすることはできないのか**？

論点を軸にした国会報道を

「『逃げ切り』に自信」の冒頭の記事も、改めて見直してみれば、❗報じられているのは**「政局」**だ。**「野党は、答弁を不安視される首相に照準を合わせ追及する方針だ」「（自民党幹部は）『逃げ切り』に自信を示す」「（野党関係者は『政権へのダメージになる』と指摘する」**。

「照準」という言葉に見られるように、ここでもまるで❗対戦ゲームのように、いかに相手にダメージを与えるか、いかにポイントを稼ぐかに国会審議のねらいがあるかのように描かれている。

そこに🌹欠けているのは、**何が論じられ、その論点はどうなったか**、だ。🌹🌹日本学術会議の任命拒否問題で言えば、菅首相が恣意的に違法な任命拒否をおこない、そのことについてまともな説明も国会でおこなわなかった。だから野党は集中審議で引き続き学術会議の問題を取り上げることを求めている。**そういう事態であることがこの記事では**😠**全く記述されていない**。

いや、「恣意的」とか「違法」とかは判断が分かれることだから、そういう主観的な判断をストレートニュースに混ぜることはできない、と❗反論が来るかもしれない。**ならば野党の指摘と政府の答弁を論点整理すればよいではないか。**野党は繰り返し、学術会議の会員の任命は「形式的任命」だという 83 年当時の答弁に言及した。恣意的な判断の余地は考えられておらず、答弁でも推薦の通りに任命すると法解釈を詰めていることが答弁されていた。立憲民主党の小西洋之議員は、当時の資料を丹念に掘り起こして質疑に臨んだ。

しかし菅首相はそれらを受けとめず、解釈は変更していないと主張し、83 年答弁について加藤勝信官房長官は、40 年前の国会答弁の趣旨を把握することは難しいと、過去の国会答弁の意味を無効化する発言を行った。

🌿**そういう‼論点整理をおこなうことの方が、「逃げ切った」とか「政権へのダメージ」とかの「与野党攻防」を論じるよりも大切ではないのか。**なぜそういう論点を軸にした報道ではなく、「与野党攻防」という対戦ゲームのような報じ方が政治部による節目節目の国会報道の「スタンダード」であるのか。

山崎雅弘氏の批判も、「『逃げ切り』に自信」という記事への多くの人の違和感も、結局そこに行きつくように思われる。政局報道もあってもよい。しかし、**政局報道ばかりでなく、国会を見続けている政治部記者は、もっと📍論点に沿った国会報道をおこなうべき**だ。

論点に沿った報道をおこなえば、事実を記述しながらも、何が問題と指摘されたのか、その問題に対して政府が説明責任を果たしたか否か、といったことを記事にできるはずだ。そういう記事があって初めて、野党の「追及」が正当なものであるか否か、政府与党の「逃げ切り」が正当なものであるか否か、読者が判断できる。

国会審議では❗野党議員は敵失をねらったり政党アピールを繰り返しているわけではなく、学術会議の問題で言えば、記者が任命拒否の違法性を繰り返し問うて説明責任を求めているのと同様に、野党議員も‼**違法性を繰り返し問い、説明責任を求めている。**その意味では、報じるべきことはたくさんあるはずだ。なのに、**野党議員の質疑が論点に即して取り上げられることは少ない。**

批判的な視点は、識者のコメントに求められがちだ。しかし、任命拒否の撤回のような「結果」が出なければ国会審議の内容は報じるに値しない、というわけではないだろう。

論点に注目せずに、まるで対戦ゲームのように国会を見てしまうと、「ゴールを許さなかった」「負けを認めなかった」政府与党の「勝ち」のように見えてしまう。野党はなんとか「敵失」をねらっても、「ダメージ」を与えることに失敗したかのように見えてしまう。‼客観的な政局報道のように見えて、そのような報じ方は、😡**政権側に「余裕」があるように見せ、**😠**野党側を「無力」であるように見せる報道**になってしまう。そのような政治報道は、冒頭に紹介した山崎雅弘氏が語る通り、**「論理的な批判の腰を折るという面で『‼堕落のアシスト役』ですらある」。**

そのような**「政局」報道に偏することをやめ、論点を軸にした報道に重点を移せば、野党議員の役割をより政党に伝えることになり、報道もより権力監視の役割を果たすことができる**はずだ。

野党議員の法案審議や行政監視活動を、まるで政権へのダメージをもっぱらねらった作戦であるかのように報じていないか。政治部記者の方々には、言葉遣いも含めて、ぜひ自己検証していただきたい。

◆短期集中連載「政治と報道」第 7 回 ＜文／上西充子＞

上西充子